

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター
http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019

躍動する中国と「三自愛國」のキリスト教 ——中国教会代表団を迎えて

RCCセンター長 栗林輝夫
 (法学部教授・宗教主事)

中国から代表団が来校

中国のキリスト教関係者が四月二十五日、若葉の上ヶ原キャンパスを訪れた。これは日本キリスト教協議会(NCC)が仲介した訪問で、今回が三回目の来日。代表団は三自愛國運動全国委員会委員長の季劍虹氏を団長にした十人の中国全土からの教会関係者である。女性四名を含む中国のお客様は、上ヶ原キャンパスの全学合同イースター・チャペルに出席して、学生と一緒に復活節のメッセージを聞き、ゴスペルクワイアの歌声に耳を傾けながら、関学キャンパスの美しさに驚嘆の声をあげる一日を過ごした。

三自愛國運動を強調

中国のプロテスタント信者数は中華人民共和国が成立した当時は約七十万あまり。共産主義政権下の憲法で、「宗教の自由」を保証されたものの、文化大革命では教会すべてが閉鎖され、キリスト教は紅衛兵の激しい迫害にさらされた。そんな現代史の経過もあって、二限目のRCC・神学部共催の講演会は興味

津々、「今日の中国におけるキリスト教」と題された李団長の公開講演を聴くことになった。

中国のキリスト教教会は中華人民共和国の成立直後、「自治、自養、自伝」を掲げた。これは国内の教会運営や伝道は中国の教会人が責任をもって行い、外国人宣教師に頼らずに自分たちで独自に遂行するというもの。

以来、中国のプロテスタント教会は教派を認めず、「中国基督教三自愛國運動委員会」と、一九八〇年に創られた「中国基督教協会」の二つの組織によって運営されてきた。これを不満として、三自愛國運動に参加しない非公認の「家の教会」も存在しているが、「三自愛國主義」の中国教会の原則は、「イエス・キリストを信じ、中国人民を愛する当然の帰結」と李団長は熱く語った。

国家と宗教の自由

しかし気になるのは教会と国家の関係。「三自」は良いとしても、「愛國」は国家主義への隷属ではないのか。本場に「信仰の自由」はあるのか。そんな危惧の声に対して、「教会が国家に隷属していることはない」と李団

長はきっぱりと否定し、公共の秩序を乱さないかぎり、宗教の自由は法令によって確保されていると断言した。外国人による伝道や神学書の翻訳と出版は自由なのかという学生の質問には、三自愛國委員会の許可を得れば可能と答えたものの、「今後の課題」でもあると率直に認める一幕もあった。

いっそうの相互交流を

関学の創始者ウォルター・ランバス博士は上海生まれで、後に中国で医療伝道に活躍した世界的宣教師だが、今年是中国でキリスト教が宣教を開始してから二百周年の記念の年。教会も改革開放政策によって急成長を続け、今では全国に二千万人の信者と五万の教会があるという。しかしバブル的な経済発展がひずみを生み出しているのも事実で、青年や学生たちは、物質至上主義ではない精神的充足をキリスト教に求めているようだ。中国には吉林大学をはじめ本学が交流をもつ大学がいくつもあるが、キリスト教の高等教育の領域でも今後いっそうの協力と情報交換が必要になるだろう。

第34回RCCフォーラム講演抄(2006年12月14日)

平和を創る ～あるNGOの軌跡から～

前キリスト教と文化研究センター教授
前 島 宗 甫



はじめに

戦後の日本のあり方と日比関係をめぐる、一九七〇年代に日比間に民衆レベルの連帯活動が生まれた。そのきっかけに二つの事件があった。

「ナボタス事件」

一九七四年五月、マニラを訪れた私はナボタス事件を知らされた。マニラ湾に面したナボタス漁港の近代化工事を請け負った日本企業が、ずさんな浚渫工事のため漁港に隣接した村を水浸しにした事件である。大阪を中心に「ナボタス住民と連帯する会」が結成され、被害者住民と話し合うことを求めて建設会社と交渉が持たれた。フィリピンの教会のバックアップや国際的な関心もあって、翌年、会社側が排水と排水溝の新設を約束し合意書が交わされた事件である。

「カガヤンデオロ事件」

一九七五年一月、日本カトリック正義と平和協議会が、日本の製鉄会社のカガヤンデオロ進出に伴い、フィリピンの教会から実態調査の要請を受けた。住民の強制立ち退き問題と有害ガス発生問題であった。当時同社

が操業していた千葉では、公害認定患者たちによる新設計画差し止めと損害賠償を求める裁判が行われていた。裁判で会社側は「焼結工場はフィリピンで建設中」と証言し、原告側とフィリピン側を激怒させたのである。この結果会社側は高性能の集塵装置を取り付けることで収拾させた。

この二つの事件に共通点があることに、詳しい説明の必要はあるまい。戦後、アジアからの反日感情に「おとなしく」していた日本が、アジア各地に生まれた軍事独裁政権・開発独裁政権(フィリピンはF・マルコス大統領)を利用して進出を始めたケースであろう。

このような運動がきっかけとなり、日比間の課題に取り組む市民、研究者、教会関係者たちが「日本フィリピン問題連絡会議(JCPC)」を立ち上げた。日比間の課題、とりわけ経済進出、ODA、独裁政権下の人権、民主化などを日比双方で連帯しながら取り組み始めたのである。

ネグロスキャンペーン

一九八五年秋、UNICEFが「十四万人の子どもの命が危ない」と、ネグロス島の飢餓宣言を世界に発信した。

ネグロス島は「負の遺産」の典型例である。私たちが関わる西州は砂糖産業によるモノカルチャー型経済の典型的構造を持つ。人口の1%の大地主が農地の六〇%を支配する。豊かな土地がありながら自らの食糧生産が許されない。「食糧を必要とする人々はモノを自由にする立場にない」(S・ジョージ・なぜ世界の半分が飢えるのか)。この飢餓の構造をどう変えられるのがネグロス島の飢餓への対応と私たちは考え、「日本ネグロスキャンペーン委員会」を一九八六年二月スタートさせたのである。

まずは緊急支援である。

命の危険にさらされている人びとに先ず必要なのは食糧と薬品を届けることであろう。支援活動を国際的に実施する場合、大切なのは「誰がカウンターパートか」である。そのパートナーと現状認識、分析、方向性などを共有できるか。これが支援の内容を決定付ける。私たちの場合、先述のJCPCを通してフィリピンに信頼できるネットワークができていた。たちまちのうちに教会、NGO、砂糖農園労働者組合が協力してカウンターパートが組織され、緊急支援が始められた。



次いで復興のためのプロジェクトである。

スタート時から「いつまで支援を続けるのか」、「いつ終わるのか」が私たちの課題となっていた。ネグロスの飢餓は構造的なものである。簡単にやめてしまいうわけにはいかず、一年後に自立のための「復興プロジェクト」を立ち上げた。農業研修所である。ネグロスは砂糖の島である。砂糖農園労働者はいても農民はいない。有機農業による技術研修を行うことにより、自立農業のモデル作りを目指した。三番目にたどり着いたのが社会・経済プロジェクトである。

人びとが農業による生産手段

を獲得した上で必要なのが、それを換金するための流通手段の獲得である。私たちはバナナに思いを馳せていた。私自身にひとつの原体験がある。一九七二年、バナナ農園のすぐそばで暮らしたことがあった。そこで隣家の赤ちゃん（養子）が栄養失調で死亡するのを目撃した。豊かに稔るバナナがありながら人びとが飢えている。この状況が衝撃的であった。フィリピン産バナナの八〇％が日本に輸出されている。多国籍企業に支配されているバナナはフィリピン人のものではない。鶴見良行は「生産の自由と選択が奪われ、消費の自由が強制された経済の仕組み」

（『バナナと日本人』）と、現在のグローバル経済の仕組みを喝破していた。バナナを食っているのか、食わされているのか？ 同じ食うのなら自分の納得できるバナナを食おう。納得できるバナナを生産してもらおう。これが自立にむけての社会・経済プロジェクトの立ち上げの動機となっていた。バナナと砂糖の島の黒砂糖。これが日本の消費者とネグロスの民衆の自立活動を繋ぐ民衆交易（オルタナティブ）の商品となった。無謀にも、

ボランティア活動が企業を生み出してしまったのである。

この三つを並行的に行うことを、私たちは援助から自立への「三位一体論」と呼んだ。

オルタナティブ

ネグロスの民衆にとつて自立への障壁は、土地がない、資本がない、流通にアクセスできないというナイナイ尽くしである。資本が援助や生産物からの収入で得られた時、流通システムの確立が必要になる。それならば民衆によるオルタナティブな流通システムを構築してみよう。これがオルタナティブを生み出した背景であった。一九八六年十二月、フィリピンにオルタナティブ・カンパニー（ATC）が、一九八九年十月にオルタナティブ・ジャパン（ATJ）が誕生した。出資者は生協、共同購入グループそして賛同する個人であった。

アジアに開放し、アジアを見ることによって日本を見つめ直すこととする活動である。援助の目指すところは、援助をしなくても良い状況を作り出すことである。バナナ交易を始めて「バナナ村自立五カ年計画」を策定した。バナナを交易することによって、「衣食住」などの最低限の生活基盤を五年を目途に確保しようとするものであった。これらの目的は、多少の差はあれほぼ達成された。しかし、順調に見えた自立への支援は大きな問題に直面することになった。環境問題である。「日本がバナナを買ってくれる」と農民がバナナの作付面積を広げた結果、バナナにウイルスや虫が異常発生し、立ち枯れを引き起こしてしまったのである。自然の調和を乱したことに對する自然の反乱であろう。私たちは「自立農業計画」を策定、農業を軸とした地域コミュニティの確立を目指した。複合型農業による環境を破壊しない循環型農業を目指したのである。

日本側に問われたことは、「バナナを買って山を痩せさせてはならない」ということである。複合的有機農業の確立によって、貿易の公正さだけでなく土地に富を蓄積することを考え実践することとなった。

平和への想像から創造を

グローバルイズム（グローバルな権力集中システム）へのオルタナティブは何なのか。新しい回路の創造を目指してNGOが動き始めた。一九九二年のリオ環境サミットを初めとして国連の会議などへの進出が始まった。政府会議と同時進行でNGO会議が行われ、各国政府へのロビ活動も活発になっていった。特筆すべきは、国家を経由せず世界的な意思決定の場に直接介入を試みたことである。樂觀的ではないが、民衆による自己統治のヴィジョンを創造できるだろうか。

漢字の平和は、公平・平等に穀物（食糧）が口に入る（象形文字である「和」という意味を持つ。私たちJCNCA・ATJの試行錯誤は、モノを食うという生活の原点を見つめるものとなった。それは平和の原点でもある。ヴィジョンは人間の能力、想像力の産物であろう。単なる予見ではなく、実践、経験を通して想像され、オルタナティブ（別の道：マタイ福音書二章十二節）の創造へと結びつくことを目指したい。

キャンペーンの中のキリスト教シンボル(その10)

オリーブ

センター副長 RCC 教授

樋口 進



吉岡記念館横の「ベルスクエア」には、聖書の植物が二十種類ほど植えられています。その一つにオリーブがあります。

オリーブはキリスト教では平和のシンボルとなっています。大洪水の後、ノアは地上に水が引いたかどうかを調べるために鳩を放ったところ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえて箱舟に戻ってきたとあります(創世記八・11)。これは、大地が再びその胎内から生命を生み出したるしであるばかりでなく、元々はまず何よりも神が人間に平和と祝福を贈ったというしる

しです。ちなみに、たばこのパイプの箱には、この鳩がくちばしにオリーブの枝をくわえている絵がデザインされています。また、国連旗もオリーブの枝葉が地球を取り囲むデザインになっています。

詩編五二・一〇には、「わたしは生い茂るオリーブの木。神の家にとどまります。世々限りなく、神の慈しみにより頼みます。」とあり、敬虔な心を持つゆえに神の庇護のもとにある者がオリーブの木にたとえられています。また、預言者ゼカリヤは、七つのともし火をともした黄金の燭台の左右に立てられた二本のオリーブの木の幼を見ますが、これは二人の「油注がれた者」で

あると言われており、非常に貴重な者の象徴とされています(ゼカ四章)。

ギリシアではオリーブの木は、ゼウスに奉獻される聖なる木で、オリンピアの競技に於いて勝利者は神々の父ゼウスから一本のオリーブの枝で作られた冠をかぶせられた、と言われています。

くちばしにオリーブの小枝をくわえた鳩の図は、キリスト教葬礼美術でも頻繁に見られ、死者の靈魂の平安を象徴しました。「受胎告知」の絵では、天使カプリエルが純潔を象徴するゆりの花(マドンナ・リリー)を持った絵が多く描かれましたが(ポッチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、エル・グレコなど)、

新書紹介・・・『聖書の解釈と正典——開かれた「読み」を目指して』

(キリスト新聞社)

本書は、RCCの「聖典と今日の課題」プロジェクトが2005年度に開催した4回の公開研究会の内容をまとめたものです。前半の第一部(聖書の「読み」を問いなおす[辻、水野])では、伝統的な歴史的批判的解釈方法の問題性と可能性、文芸論的な新しい解釈方法の意義等について取り上げ、歴史的批判的読み方と文芸批評的読み方の接点と相違点について明らかにしようと試みています。後半の第2部(正典を問いなおす[嶺重、樋口])は「正典」に目を向け、正典という概念そのものが内包する矛盾と問題性を指摘し、正典が常に再解釈されるべきものであることを示しています。このように第1部と第2部のアクセントは異なっていますが、キリスト教の聖典である聖書をどのように読んでいくべきなのかという根源的な問いかけが本書全体を貫いており、様々な解釈の可能性が指摘されるなか、あらゆる解釈が可能なのか、それとも正しい解釈(適切な解釈)とそうでない解釈があるのか、というような聖書の「読み」そのものに関わる基本的な問いに焦点があてられています。

本書の構成上の特徴としては、発題内容が論文形式でまとめられるのではなく、研究会での実際の発題の口調をそのまま保持した口語体で再現されている点が挙げられ、それだけに堅苦しくなく、読みやすいものになっています。さらに、出席者を交えた発題後のディスカッションの様相もそのまま会話体の文章で収録されており、この研究会に参加されなかった方でも、各回のディスカッションでの興味深いやりとりをリアルに感じ取ることができます。

もちろん、解釈には様々な複雑な要素が含まれており、簡単に一つの結論を出すことはできません。そのような意味でも、本書は明確な一つの結論を提示しようとするものではなく、むしろ、聖書を解釈するという明確な目標に向かって一つの方向性を指し示そうとする一つの試みであると言えるでしょう。

編集後記

今年度最初のニューズレターをお届けします。今回は、つい先日来校された中国のキリスト教会からの来訪団の方々とのお会いとその報告をはじめ、フオラム抄もアジアがテーマとなっており、近隣諸国と日本のキリスト教の歴史についてあらためて問われる内容となりました。また、研究プロジェクトからの新著紹介もありますように、十一年目を迎えたRCCがこれまで培った力を外に向かって発信する時を迎えたことを感じていただければ幸いです。

経済学部准教授・RCC主任研究員

舟木 讓



イタリヤ・シエナ派の画家の間では、この写真にあるシモーネ・マルティニーの「受胎告知」のように手に平和を象徴するオリーブの枝を持つ天使をこぞって描いたといふことです。